

# ゆうゆう

NO. 227

## インタビュー

おかもと まなこ  
**岡本昌子さん**

(テキスタイル作家)



今回のインタビューは、大学でテキスタイルを学んだ後、七十代となる今までずっと糸を紡ぎ、布を織ってきた、テキスタイル作家の岡本昌子さんです。

何でもすぐに手に入るこの時代、ハンドメイドの静かなブームが続いているのには、手から生み出すものの力が関係しているのでしょうか。「手の仕事は個性が出ます。織りには、素材とつき合って気づく面白さもある」という岡本さんに、テキスタイルの魅力、ハンドメイドの力などについて、東京都昭島市の工房でお話を聞きました。

### ◆プロフィール◆

一九五三年福岡市生まれ。元藩校の修猷館高等学校を経て、一九七五年金沢市立美術工芸大学工芸科卒業後、毛の手紡ぎ・手織り作品を中心に制作活動を開始。一九七八年日本クラフトコンベ京都・大林組賞、一九八二年全日本新人染織展・通商産業大臣賞受賞。一九九八年より日本クラフトデザイン協会理事、理事長などを歴任。二〇一〇年よりNPO法人 Nature Saves Cambodia Japan 副理事長。これまで台湾・金沢・現代織物芸術交流展などに招待出品、金沢・世界工芸コンペティションに出展。多摩美術大学、早稲田国際ビジネスカレッジでテキスタイルを教える。

### 一人で絵を描くことが

#### 好きだった少女時代

大学でテキスタイルを学び、制作歴は五十年あまり。岡本さんのテキスタイルは、素材作り―糸紡ぎから始まるのですね。

岡本はい。タペストリーのような表現の作品には主にシルクを用い、身につける作品には主にウールを使っています。時に、コットンや、ウールにシルクを混ぜて紡ぐこともあります。

羊毛の紡ぎはまず、刈り取った「原毛」をきれいに洗って丁寧ほぐすことから。カード機(毛を一方方向にほぐし、そろえる道具)ですらにほぐした原毛を、目的に合わせて染色します。

染料は、草木染めも化学染めも、地球に負担の少ない染料を使っています。染めた原毛を織りあげるまでの工程は、次ページをご覧ください。手紡ぎウールでできた織物は、仕上げも大切です。仕上げの工程で羊毛の味がグツと出てきます。

もの作りへの関心はいつ?

岡本私は一人っ子で、絵を描いてお留守番してられるような子でした。小学校に上がり、休み時間になると「絵を描いて」と私の前に女の子の列ができ、従姉妹が持っていたファッション雑誌のスタイル画をまねして描きました。また、色にこだわりの強い子どもでした。長い時間をかけてランドセルを選んだり、花柄のポットが気に入らないうちを塗ってワントーンにしたり、自分の部屋の壁の色を好きな布を貼って変えてみたり。母親はいつもあきれていました。

美術を勉強しようと思ったきっかけは?

岡本中学と高校の美術の先生との出会いが大きかったです。中学の先生は引っ込み思案な私の造形作品を「面白い、もっと作れ」と応援してくれました。文化祭の演劇の背景担当になったときも、夕焼けの空を紫に、雲を黄色に描いて怒られるかなと思ったら、「おお、いいじゃないか」とほめてくれ、描くことが自信につながっていききました。「お前、美大に行かんか」と背中を押してくれたのは高校の美術の先生です。



- ①ローラッグを作る…染めた原毛をハンドカーダーで一方方向にそろえ、思い描く混色で「ローラッグ」を作る  
 ②糸作り…ローラッグを足踏み糸車のポビンの糸にジョイントさせ、ペダルを踏んで弾み車を回転させる。ポビンの小さな輪との回転比を利用して引き出した毛に撚りを掛け、糸にする  
 ③織り…織るプランに合わせて経糸を整経台で同じ長さにとそろえ、織り機に掛け、巻き取り柄に合わせて綜統に糸を通す。次に幅をそろえる筈に糸を通して、織る準備をする。織り機のペダルを踏んで開口したところに緯糸を入れ、次のペダルを踏んでできた開口に折り返して糸を入れ、織り進める

金沢市立美術工芸大学(以下…金美)への進学はすんなりと?

岡本 いえいえ。両親は大反対でした。母の笑顔が見たくて勉強は頑張っていたので、親は家から近い九州大学(以下…九大)に行つて、就職は地元で公務員、と思いついていたようですが、ちょうど学生運動が盛んな時代で、世の中のレールに乗るような生き方に疑問を持ち、実家に下宿していた九大生たちの政治集会に参加したりして

ました。親もしまいには、一発合格で公立なら、ということでも金美を受けたくんです。

織物は、大学に入って初めて心が通じた、織り志望の友人と共に学びたくて専攻しようなの。最初、織物つて生真面目で面白くないと思いましたが。でも金美では贅沢な学びができました。工芸はいくつもの専攻があるため先生の数が多く、生徒は工芸科一年で十五人。各専攻は二、三人ず

つと、とても手厚かったです。

「好き」に変わったのは?

岡本 それはずっとあとのことです。卒業制作のときに、このままずっと織りを好きになれないのはいけないなと思つて(笑)、私は何に魅力を感じているのか、それをどのように織りで表現したいのかを考えました。風のゆらめきや光のきらめき…自然のひとこまを心象風景として「絣」で表現しようと決めました。絣は、柄を出す部分は糸で縛つて、染料が染み込まないようになります。染めたあと糸をパツと離すと微妙にゆらぎが出るのを利用して表現しようと思戦苦闘。今のようにググることはできません(笑)。絣の道具を作りたいと鍛冶屋の先生を訪ねると、苦虫を噛み潰したような顔でいつも厳しい先生が、つきつきりで教えてくれました。きつと生徒の自発的な制作態度が嬉しかったのでしょね。三年前に亡くなられた十代大樋長左衛門(当時は大樋年朗)先生にも評価会で応援していただくなど、友人や先生に見守られ、だんだん制作する楽しさを知っていきまし

た。また、ファイバーアートが世界中で注目を浴びていた時代で、ポーランドの現代アーティスト・ヴァカノビッチの、作品を構成する糸の表現力に衝撃を受けました。

平らかな気持ちでいると

よいものがやってくる

お仕事の第一歩は?

岡本 好きだったフィンランドのライフスタイルブランドを扱う会社に就職が内定していたんですが、オイルショックの不況で取り消しに。それで、東京でアルバイトをしながら織物を続けることにしました。転機といえば二十九歳のときでしょうか。母の注文で着物を織ることになり、卒業制作の技法で付け柄に仕上げました。全日本新人染織展に出してみたら思いがけず「通商産業大臣賞」をいただき、初めて、父がテキスタイルの仕事に納得してくれました。

「社団法人日本クラフトデザイン協会」とのご縁はその頃から? 岡本 日本クラフトデザイン協会が

主催する公募展「日本クラフト展」には、二十代半ばからポツポツ出していました。クラフト展は見るのも出展するのも楽しかったんですけど、団体に所属するのが苦手なので、会員へのお誘いは敬遠していたんです。入会したのは、会員で手紡ぎをやっていた知人が亡くなり、クラフトの中に手紡ぎを残したいと思ったのがきっかけ。四十代になってからです。

### クラフトデザインとは？

岡本協会の母体ができたのは一九五六年。クラフトデザインを「美術工芸とは一線を画し、現代の生活に相應しいスタイルを持った工芸」と位置付け、活動を開始しました。時代とともに変わる生活の形や価値観の多様性に応じ、確かな技術と素材を大切にしながら、『暮らしが必要とされる美しいもの』を創造していくことと私は考えます。

### 爽りはありませんか。

岡本協会の理事時代は二年おきに個展を開いていましたし、福岡の父が亡くなってから母を東京に呼んで同居し、十五年ほど介護をし

ていて、プライベートでも忙しい時期でした。日本クラフト展の担当理事になり、特に年に一度の日本クラフト展の司令塔となって審査、展示計画、設営管理と展覧会の諸々を運営するので、自分の時間がとれない時期が続く、理事長になってさらに「責任」という仕事が増えました。でも、得たものは大きいです。

多ジャンルの作家さんと仲よくなつて情報交換をしたり、審査員をお願いした国立工芸館館長の唐澤昌広さん、美術評論家の秋元雄史さん、テキスタイルデザイナーの須藤玲子さん、家具デザイナーの小泉誠さんなど、素晴らしいプロフェッショナルと出会うことができました。気持ちの温かい方たちばかりで、貴重な経験より発せられる言葉から多くのものを教えていただきました。海外での展示にも出かけ、設営現場の方々と一緒に汗を流し、手振り身振りですさやかな国際交流もやりました。

**NPO法人 Nature Saves Cambodia-Japan (NSCJ)**では、地雷被害で失われた綿畑を再

生し、手紡ぎ、手織りのコットン製品を復活させる活動を。携わったのは？

岡本一九七〇年代、ボル・ポト政権により文化人が虐殺されたり農民が地元を離れさせられたりし、一九九一年に収束を迎えるまで二十二年ものあいだ内戦が続きました。そのとき埋められた地雷は四百万〜六百万発。地雷や不発弾による死者は二万人近く、手足を切断するなどの負傷者は四万人を超えているといわれています。そのことを知ったとき、私の高校や大学時代に、日本に近い国でそんなにもむごいことが行われていたことに衝撃を受けました。

NHKのカンボジア支局長だった知人が、内戦の傷跡を取材した経験から現地NGO法人NSCJをサポートするNPO法人、NSCJを立ち上げました。内戦で地雷原となった土地の地雷除去を委託して、綿畑として再生する活動です。そこで持ち上がったのが、オーガニックコットンを栽培・製品化するプランです。オーガニックコットンなら農薬を買う必要がないし、栽培が米ほど重労働ではないので、



手紡ぎウール糸に、地雷除去地のオーガニックコットンを合わせ織ったコート

片方の足を失っている人でも働いて自活できると考えたんです。多数の地雷が埋められているカンボジア北西部のバダク村に二haの綿畑を持つことができ、綿の生産ができませんでした。次は紡ぐ人です。ようやく見つけたのが、プノンペンから一時間ほどのところにあるコーダ工村。昔から織物が盛んでシルクアイランドと呼ばれている所です。ところが手紡ぎコットンを織ったものを見ると、絹織りの感覚で織られていて出来ないものでした。手紡ぎコットンらしい織地見本を作って提示し、製品作りを指導するというのが私の関わり。少量生産でなかなか雇用までは生み出せず、活動に終止符を打った



岡本さんの作品。見る角度で色が変化するシルク素材のジグザクのタペストリー

あとは、畑を無償で譲り、自立への道を託しました。

## 個性が出る手の仕事を

### 自由な感覚で楽しんで

自宅で紡ぎと織りを教えていらっしゃると思います。

岡本教室は、今の家に引っ越してきた三十五年前から。個展で私の作品を見て興味を持たれ、教室に参加されるケースが多いですね。ですので、みなさんは糸紡ぎから始められます。糸を紡いで織るだけではなく、時には昔の手仕事に思いを馳せ、木枠に経糸を張り二束の緯糸をねじりながら織り進め

る「トワイニング技法」や、織り機を使わず遊牧民がラクダの腹帯を作っていた「ブライ・スプリット技法」などでミニマットを作り、織りの楽しさを感じてもらっています。テキスタイルを専門に学ぶ学校でも教えています。同じように教えり違う味があり、それが手の仕事の面白いところです。

**個性が出るんですね。教えるときに心掛けていることは？**

岡本個展を見て教室に来られた方は同じような作品を作ろうとしますがちなみですが、自分の手から生まれるもの作りを楽しんでほしいと思います。学生には「糸を創る」と題して授業をしています。もの始まりと古の人の知恵に触れること。織物の魅力を自分なりにつかんで欲しくて、多方面からのアプローチで伝えるようにしています。授業の時間では、みなさんの目を見ながらその時どきに合った声掛けを心掛けています。私はうちにもこもりがちなちよっと変わった子でしたが、美術の時間が楽しかった。そんな時間を提供できたら、

と思います。どうやら教えることは好きみたい。自分が試されているように感じるときもあり、そんなこともいい経験になっています。

**布織物は世界中にあり、身近な存在ですね。**

岡本布は身を守る必需品であり、衣服は民族のアイデンティティや地位を示すものでした。新人染織展で賞金百万円をいただいたとき、大きなリュックを背負って夫とインドを二か月間巡りました。一番行ききたかった、ヒマラヤ山脈のふもとにある「レ」というチベット民族の町にも、山のほうから町を見下ろすと、軒のない小さな家がいっぱい並んでいて、おじさんがスピンドル(コマのような糸紡ぎの道具)を回しながら通りを歩いていました。織機を持ち運んでいるおじいさんは、各家庭の紡いだ糸を託されて織る仕事をしているとのこと。布作りの原点を身近にし、感動しました。布にはいろんな思いが込められています。美術展などで古布を見ると、その時代の人の営みを感じられて興味深いですね。

ここ数年、手芸ブームが若い人のあいだでも続いているようです。気持ちを落ち着かせるからでしょうか。

岡本人は何か夢中になっているときが、一番気持ちが落ち着いているんじゃないでしょうか。私は紡ぎ車を回して糸を紡いでいるときがまさにそう。がんを患った友達が、末期は、パッチワークをしたりお人形を作ったりしながら過ごしていました。

「手当て」という言葉があるように、手の仕事には人を癒す力があるように思います。

**これからのご予定は？**

岡本「好きになれない」から始まった、この年まで仕事を続けてきましたが、「ものを生み出すことってなんだろう」と自問することがあります。幼いときから手を動かし、いつも作りたいものを考えていて、そして仕事にしまつたので、改めて考えると分からなくなりました。少なくとも「自分がワクワクできる布」に近づけるよう手を動かし続けたい。そのためにはまず、健康でいなくちゃ、ですね(笑)。